

白石短歌会の軌跡

そして…今後歩んでゆく道の先に



白石短歌会の会員で、平成30年2月に96歳で永眠されました渡邊京子さんは、お亡くなりになる直前まで短歌を詠み続けていました。京子さんは、白石短歌会発足当時の64歳の時から短歌を詠み始め、その数なんと約720首にもおよぶ歌を生み出してこられました。また、お亡くなりになられた後も10月号まで生前に詠まれた歌を掲載させていただいておりますが、ご遺族の意向により掲載を終える運びとなりました。今回、京子さんを偲び、白石短歌会の皆さんに思い出を語っていただきました。そして、京子さんがいらっしやらない今、白石短歌会はどのように歩んでゆくのか、お考えを伺いました。

京子さんは「一生をきれいに生きた人」でした。外に出ることが好きで、はつらつクラブなど、いろいろな村の催しに参加するたび、懐かしい話をしてくれたり、楽しい話をしたりしてくれ、いつでも元気いっぱいな方でした。「ああいう風に生きたい」と今でも私の目標になっていますね。京子さんが欠けた今、彼女が成し遂げたように、自分も頑張っている会が続く限り、月1首詠んでいきたいと思っています。

美しく逝きたる女の名残り 献花^{はな}
カサブランカの香に浸り住む
渡邊美枝子

名残りをしき事には有れど凛として
あやかりたかし君の人生

この歌が、京子さんに対する哀悼でもあり、私の今後の目標です。これからも周りの皆さんの助けを借りながら自分のできるかぎりの作歌活動を続けていきたいと思っています。

自然に恵まれた環境で、作歌活動ができることはとても幸せです。心身ともに健康なものこの自然のおかげでしょう。そんななかで活動を続けられるありがたみをかみしめながら、京子さんの分も、この自然を歌にのせて伝えていきたいと思っています。

坂本 美江

京子さんは今も私の中、いいえ、白石の中に生き続けているようです。京子さんの思い出を聞かれた時、私は「言うことはない」と答えました。これは、近くで生き、思い出がありすぎるからです。言うことではないのは、ありすぎて言葉にできないということなのです。私にとってはそれほどの方でした。歌を始め30年以上が経っても、昔の歌を見返すと今日のことのように思います。歌は私の人生です。これからの、この身尽きる限り詠み続けますよ。

ゆったりと初日まぶしく七十路ゆく
今日をよろこび明日を楽しむ
白石 礼子

姉・京子は20歳の時結婚しましたが、待望の子どもがなく、6歳で母を亡くした私が養女となり、今の子を産む形となりました。京子とは母と子のように幸せな生活を送っていましたが、突然の母の終焉に驚きと哀しみの日々が過ぎ行くなかで、母の思い出を歌に託すことにより哀しみがしみじみと深い感謝の念に変わってきました。私たちはわずか4人となってしまうましたが、歌を支えに心を組んで残りの少ない人生を楽しみたいと思います。

「おかあさんきれいになったよ」辛く哀し
冷たき頬に最後の化粧
渡邊阿里子

京子さん、最後の歌

「たゞいま」と
元気にはずむ声思い
早く退院曾孫に
逢いたし

病棟にて詠まれた歌
最後はご自宅に帰り、
曾孫さんに会うこと
ができ、翌日に
天国へと旅立たれました。



京子さん、
お疲れ様でした
ゆっくり
おやすみください。